

歴博 くらしの植物苑だより

第119回くらしの植物苑観察会 2月28日(土)

ブナの木と木地屋の世界

中川 重年(本館研究部客員教授)

ブナ林とともに生きた木地屋

江戸時代、日本の奥深い山地に居を構え、そこで森林を伐採し、木地加工をし、原木がなくなると別の場所に移動、数十年あるいは150年もあつて、再びそこに現れ木を切り木地を挽いた職業集団がありました。絢爛な蒔絵などの漆器を作った輪島や会津など全国の産地の背景には、こうしたブナの森林を加工した人々があつたのです。轆轤(ろくろ)という器機を携え各地を移動したのです。本日はこの木地屋とブナ林のことを話します。

- 1 日本の中で活発に動いた場所は近畿、ここから四方に広がってゆきます。
- 2 日本にこの技術が伝播する前には大陸をどうも西から伝わってきた技術のようです。
- 3 日本の轆轤と同じものがネパールにあります。このほか各国でさまざまな轆轤が使われてきました。
- 4 ブナ林の伐採した後には農地ができ村ができてゆきました。
- 5 移動した木地屋は大きな温泉でさまざまなお土産品を作ります。こけしがその代表格。
- 6 現在のブナ林は自然保護の対象の樹木となりました。現在ではブナの木材は珍しい存在になってしまいました。
- 7 ヨーロッパではブナ林は計画的に作っている一種の人工林です。木材も丁寧に使うために最近では燃料に使われています。
- 8 手回しの轆轤いろいろな方法で木材をまわします。往復回転運動は古いシステムで南アジア、東南アジアの田舎に残っています。
- 9 こまの絵付けは大山ゴマをまねたものです。

次回予告

第120回くらしの植物苑観察会 2009年 3月28日(土)

「くらしの植物苑と木の利用」 中川 重年(本館研究部客員教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料